

## 美學の基礎に就ての考察（承前）

深田 康 算

## 十三（續き）

## 三 強勢 Intensivierung

美的形像は個々の内容が集中に依つて一つの全體を構成するに至つた所の感覺（若しくは知覺）内容である。此の感覺内容が其自らの意味を有すると共に、彼の個々の内容も（此の如き全體を構成する要素として當然亦其自らの意味を有する感覺内容である。美的形像は、それ故に、其自らの意味を有する個々の感覺内容を要素として、一つの全體を構成して居る所の、其自ら意味を有する感覺内容なのである。斯くして吾々は美的形像に其全體としての統一の側と、其統一の中に攝取されて居る種々なる要素の側とを認めなければならぬ。而して其統一の側——即ち如何にして感覺内容が一つの全體を構成するか、又此の如き一つの全體が如何にして其自らの

意味を有するか——を吾々は『集中』の條下に説いたのである。そこで尙殘つて居る所の問題は此の如き一つの全體を構成する要素たる個々の内容が全體の統一の下にでなく、夫々個々の内容として持つて居る所の其自らの意味とは何であるか。個々の内容は如何にして感覺内容若しくは知覺内容として其自ら意味を有し得るか。換言すれば、個々の要素は如何にして個々の内容として感覺的捕捉そのものに取つて興味あるものたることが出来るか、そして隔離され集中された全體の中に於て、其全體の意味を強調するのに役立つ得るのであるかと云ふ點である。云ふ迄もなく一つの全體に統一され集中されぬ以上は、美的形像は成立しない。個々の内容が美的形像の要素たり得るのは、それであるからして、集中的統一即ち形像性 *Gebildhaftig-*  
*keit* に基くと云へる。全體への統一に依つて、個々の要素は始めて美的形像の要素となり、其自らの意味を有する内容たり得ると云へる。然しながら夫れと同時に個々の要素は、一方に於て全體に依りて可能ならしめられると共に、他方に於ては全體の中に於て其要素として存在して居る。全體が無ければ要素が無いと云へると共に、要素が無ければ全體も亦有り得ぬと云はなければならぬ。美的形像の要素たる個々の内容が、其自ら意味を有するのは、それ故に一方に於ては、集中的統一即ち形

像性に基くと共に、他方に於ては、個々の内容夫々が個々の内容として其自らの意味（即ち美的意味）を有するのでなければならぬ。個々が全體に依つて美的意味を與へられる如く、全體が個々に依つて其意味を高揚されることを認めなければならぬ以上は、個々の内容そのものに已に其自らの意味（即ち美的意味）のあることを承認しなければならぬのであらう。個々の内容の有する此の如き意味——集中的統一即ち形像性に基かずして、個々の要素が個々の要素として有する意味——を吾々は『強勢』と名づける。『強勢』とは個々の要素の有する印象の強さに依つて、一つの全體たる美的形像が其美的意味に於て高揚され強調されるの謂である。

強勢的因子は、之れを直接的と間接的との二種に別けて、見ることが出來やう。

(イ)直接的強勢因子 direkte intensivierende Faktoren. 之に先づ數へらるべきものは感覺の強度 Intensitätsunterschiede der reinen Sinnesempfindungen である。感覺の強弱の區別(勿論感覺の強弱とは同一種の感覺領域内に於てのみ云ひ得る)は、種々なる感覺が吾々の感覺的捕捉、知覺若しくは評價の働きそのものに對して有する意味の差異に基いて生ずる。例へば光の強度と吾々が呼ぶ所のものは、物を見得ることに對して如何なる意味を有するか、の點から、黑白の性質的差異を評價した結果生じた所の區別で

ある。白色に近づくか黒色に近づくかに随つて、物の明瞭さが増し若しくは不明瞭さが増すと云ふ事實に基いて、白色と黒色との區別が同時に明暗の程度と見做されるやうになり、而して明るきものが強度の強きものと見做さるゝやうになつたのである。聽覺に取つての音の強弱や觸覺に對する壓の強弱の區別の如きも、皆吾々の感覺的捕捉の難易に基いての區別であり、吾々の注意が或依他的意味に依つて惹起されて居らぬ限り、強い音や強い壓は弱い音、弱い壓に比して容易に捕捉される、捕捉に都合がよい、若しくは知覺に取りてより強いのである。感覺の強度は、それ故に、個々の感覺内容が有する所の其自らの意味であると云へる。而して感覺知覺内容の有する其自らの意味とは、即ち美的意味に外ならぬのであるからして、一つの美的形像に含まれて居る個々の要素の有する其自らの意味が先づ第一に其感覺的強度であることが許される以上、此の如き感覺的強度が美的形像全體の意味に對して強勢の因子たることも明瞭であらう。

然しながら感覺的捕捉作用に取りての強さ、若しくは感覺内容の強度は、必しも常に上に云つた感覺的強度のみに限られては居らない。普通弱い度の感覺内容と云はるゝものも、或場合には感覺的若しくは知覺的捕捉作用に取りて強い印象を與へ

得る。對照的背景 *Kontrastierende Forderung* の下に置かるゝ場合の如きは其著しき例である。例へば(甲)白い地に一個の黒點が印せられてあるものと(乙)同じく白い地に一面に黒點が印せられあるものとを比較する時、其黒點そのものは兩者に於て同じ大さと假定するならば、兩者孰れか一方が、上に云つた感覺の強度のみを標準として取る限りは、他方よりも強いと云ふことは出來ないであらう。併し(甲)に於ては其一つの黒點が其地との對照に依つて、自ら吾々の凝視點となり、感覺内容として強い意味を有し來たる。即ち、感覺的強度の上からは同じ程度のものに見らるべきものが、對照的背景の、影響の下に其印象的強度を異にするのである。純粹なる調音(トーン)が同じ強度の騒音(ノイズ)に比する時、強い(若しくは強い印象を與へる)所以も亦此の如き對照的背景の影響に基く。蓋し吾々の聽覺の云はゞ地をなして居る所のものは騒音であるが爲めに、此背景から對照に依つて、強められる所のものは、騒音でなくして調音たるべき筈となるのである。色彩感覺に就ても同様な事が觀察されるのは云ふ迄もあるまい。——以上は或一つの感覺内容が對照的背景に依つて、強度を有するに至る場合であるが、對照に依つて強度を得來る場合は勿論之れに止まるのではない。個々の内容が互互に對照を爲すことに依つて(例へば雜多なるものゝ集合や、或は急激

なる變化の場合相互に意味を強め、随つて全體の意味を高揚する如きも、やはり此種のものが見ることが出来る。但し此場合に於ては、嚴密に云へば、對照に依つて、或一つの内容が強められると云ふよりは、寧ろ對照 *Kontrast* そのものが強い意味を有するのだと云ふべきであらう。

最も強い其自らの意味を有する所のものは、然しながら變化である。知覺され得る變化 *Wahrnehmbare Veränderungen* である。勿論變化が特に吾々の知覺に對して意味を有し來る爲めには、變化せざるものを其背景として、若しくは、云はゞ其對照的臺紙として有することを必要とする。何故ならば事實吾々の感覺内容は全體として常に變化しつゝあるに拘はらず、此の如き變化は吾々の知覺に取つては全く變化としての意味を失つて居る。然るに此全體の中の或一部に於て一つの變化が生ずる場合には、此變化と此變化より生ずる結果たる新らしきものとは、變化せざるもの、若しくは變化しつゝも變化としては知覺されぬものに對照して、特に強き意味を吾々に取つて有し來たるのである。總ての運動が強い印象を吾々に與へる所以、活動寫眞の有する魅力、花火の色や光や、音樂に於ける早い拍子や顫音や綺音等の有する強い其自らの意味は、變化が極めて強い意味を有するのに基くのである。

以上説明した感覺の強度、對照的背景に依る強度、變化に基く強度は、孰れも其れに基いて感覺内容が感覺内容として、吾々の捕捉作用に對して意味を有し來る所の條件である。感覺内容が如何にして其れ自らとしての意味を有する様になるかの條件である。如何にして感覺内容が其自らの意味を有し得るかの條件である故に、是等の條件は、それが個々の要素に認めらるゝ場合、そは自ら又美的形像の全體の意味を高揚する所の強勢的因子と云はるべきである。而又是等の條件は、感覺内容が感覺内容として直接に吾々の捕捉作用に對する限に於てのみ、働いて居る條件であり、聯想的再現的事情や依他的意味に依つて規定されぬものである點から云へば、そは直接的因子と呼ばれるべきである。是等の直接的強勢因子の外に、美的意味の強勢が聯想的再現的要素の側からも供給さるゝことは云迄もない。或一つの感覺内容が單なる形像として見らるゝ時よりも、依他的意味の下に解釋され得る經驗を擔ひつゝあるものとして、即ち空間的物象的なるものとして見らるゝ時に於て、尙一層吾々の注意を惹き、従つて見らるゝものとしても意味強きものとなる事は云ふ迄もない。例へば一つの感覺内容を單なる色彩形像として捕捉する場合よりも、之れを空間的對象的なる一つの物若しくは人として解釋する場合に於て、吾々の注意は當然尙一

層強く惹起される。それ故に、感覺内容其自らの意味に集中せしめずして、之を對象として解釋せしめ、云はゞ離心的統一を之れに附與せしめる所の依他的意味は(勿論依他的意味を美的形像に取つて無害ならしめる如き事情の下に置かれる場合に限り)自ら又形像としての意味をも強めるものとなるべき筈である。聯想的再現的要素や依他的意味は、美的形像に於て、無害ならしめられることは出来ても、全く除去されることが出来ない。全く除去されぬに拘はらず、無害ならしめられ得る故に聯想的再現的要素や依他的意味は、美的形像に強勢的因子として入り込むことが出来る。此理由からして、一方に於ては、純粹に視覺的なる要素のみから成り立つものとせらるゝ所謂『内容』なき繪畫に向つての要求が到底實現されぬことは明らかであり、而して他方に於ては、如何にして依他的意味が美的意味の強勢因子たり得るかを説明され得るであらう。——然しながら是等の聯想的再現的要素及び依他的意味から提供される間接的強勢因子に就ての考察に進む前に、上に擧げた直接的強勢因子と少しく趣を異にすると同時に、後に述べようとする間接的因子とも亦同じくない所の強勢因子の存在することを注意しなければならぬ。それは一方から云へば、聯想的再現的性質のものであるに拘はらず、一方から云へば依他的意味に基かぬ點に於



て、やはり一種の直接的強勢因子と呼ばれなければならぬ如き性質のものである。或は之れを聯想的再現的要素から提供される純粹に強勢的なる因子 *rein intensiven-  
de Faktor des Reproduktiven* と呼んでもよい。直接的因子に對して見れば、聯想的再現的なる點に於て同じくないものであり、間接的依他的因子に比すれば、直接的純粹なる點に於て趣を異にして居る。此の如き強勢因子の存在は、其自らでは何等注意を惹かぬ所の外物が、内的なるもの若しくは感情と吾々の呼んで居る所の再現的内容の之れに結び附くことに依つて、其儘直ちに強い意味を有し來たる如き場合に、特に最も著しく現はれて居る。之れを吾々は『生氣を與へること』*Belebungs* に依れる強勢と名づけることが出來やう。例へば外物に就ての知覺が、吾々の有機的身體的感情を再現せしめ、之れと結び附くことに依つて、姿勢の知覺若しくは均整の知覺として現はれるならば、此如き知覺は活々して來ると云へるであらう——有機的身體的感情の再現が之れに『生氣』を附與するのである。同様に身體的感情の再現に伴はれることに依つて、視覺に與へられた位置の變化は、運動として捕捉されるのであり、知覺内容の『生氣』を有し來たる度は斯くして愈高まるのである。之れ故に『生氣を附與すること』に依れる強勢は、再現さるゝ内的(身體的)若しくは有機的(感覺)の強さに比例し、

内的感覺が直接に經驗さるゝ時に最も強いと云へる。此の如き強勢的因子は、音樂的形像に於ては、時間的及び節奏的知覺の媒介に依つて再現せしめられ、直接に聽覺像と結び附けられる。其上快不快を伴ふ統ての一般感情——即ち客觀化される時或は悲哀とか喜悅とか憤怒とか勇氣とか恐怖とかの名で呼ばれる所のものが、未だ客觀化されず、依他的解釋の下に置かれぬ状態に在る感情——が音樂的形像には直接に結び附いて居り、尙其上に是等の客觀化された感情さへも、依他的意味を離れて、最も直接的に、換言すれば、純粹に『生氣を與へる』因子として含まれて居る。而して是等の感情の中、不快感的なるものは、快感的なるものに比して尙一層強勢的であり、従つて知覺内容其自身の意味を強調するのに役立つと云ひ得る。

(ロ)間接的強勢因子 *abgeleitete intensivierende Faktoren*、間接的強勢因子とは、強い依他的意味を有するに基いて、或感覺内容が吾々の捕捉作用と注意とに對して、感覺内容として自ら有し來る所の意味を指すのである。強い依他的意味を有する感覺内容は、當然吾々の注意を惹くことも亦強い。併し此の如き依他的意味が依他的意味として吾々の注意を惹く間は其強さは、云ふ迄もなく美的意味に取つて何等寄與する所もあり得べきでない。依他的意味の有して居る強さが依他的意味からして感覺

内容其自らの意味へ云はゞ乗り移る時、換言すれば、一つの感覺内容に其依他的意味の側から附與されて居る強さが、其依他的意味が取り去られたにも拘はらず、其強さのみは尙其感覺内容に残つて居る時、——其時に始めて依他的意味の強さは美的意味に對して間接的強勢因子たり得るのである。間接的強勢因子とは、それ故に轉移に依つて、感覺内容其自らの意味を強める爲めに役立つやうになつた所の——云はゞ潜勢的となつた——依他的意味の強さであると云へやう。例へば依他的意味の立場から強い興味を寄せ、價値あるものと吾々の見做し慣れて居る或一つの視覚内容が、依他的意味の立場から離れて見らるゝ場合に於ても、尙視覚内容そのものとして自ら吾々の強い注意を惹くのは、即ち此の如き強勢因子に基くのである。此の如き内容を吾々は『見るに價するもの』『Sehenswürdig』と名づける。而して文字通には視覚像に就てのみ云はれ得べき此語を押し擴めて、間接的強勢因子に基いて其美的意味が、強調され高揚されて居る所の總ての内容を此の名を以て呼ばうと思ふ。『見るに價するもの』の中先づ第一に數へらるべきものは、『新らしきもの』の有する強勢的性質即ち『新らしき』『Neuigkeit』である。新奇なるものが美的意味の強勢的因子たるのは、明らかに依他的意味の強さに依つて居る。何故ならば、新奇なるものとは、已に其

依他的意味の明瞭に確定して居る他の總ての内容と異つて、其れの依他的意味が始めて求められ、新たに見出されなければならぬ如き感覺内容を指すのであり、従つて其依他的意味が見定めらるゝ爲めに、吾々の注意は自ら此の如き内容に向つて強く指し向けられ、其前に、より長く立止つて居らなければならぬのである。勿論『新らしきもの』は『已に知られて居るもの』との對照に依つて強められることは云ふ迄もない。併し對照は此場合總てを説明する原理ではあり得ないことも明らかであらう。對照は『已に知られて居るもの』から『新らしきもの』を極立たせると同時に、『已に知られて居るもの』をも『新らしきもの』に對して強めるのであるからして、『新らしきもの』の有する特殊の強勢的性質の根據を對照に求めることは出來ないのである。『新らしき』が吾々の注意を特に惹起し、吾々の『見んとする意志』を強く刺戟するのは、それ故に、畢竟依他的意味としての評價に基くと云はなければならぬ。依他的意味に基く所の強い刺戟が、依他的評價の態度の取り除かれた後までも尙殘つて、其自ら意味を有するに至つた感覺内容に轉移し、そして之れに結び附いたものと考へることに依つてのみ始めて、『新らしき』が如何にして美的強勢因子たり得るかを理解することが出来るのである。

『現實的なるもの』das Aktuelleの場合も亦之れと同様である。實際にあるもの又現に今あるものとして『現實的』は吾々の行動に取つて重要な意味を有して居り、依他的意味の上に於て優つて居る。而して恰も其故に美的意味の游離の爲めには寧ろ妨げとなつても役立つことが出來ないのである。然しながら依他的意味に基いて『現實的なるもの』の有して居る強さが、其自らの意味を有する感覺内容に乗り移つるならば、それは自ら之れに對する吾々の注意を緊張せしめ、従つて此如き感覺内容そのものに一種の強い興味、一種の現實味を附與するに至るであらう。斯くして『現實的なるもの』は強勢因子として始めて重要な役目を演ずるやうになる。而して此の如くにして美的意味を強調する所の因子を指して吾々は(依他的意味に於て云ふ)『現實的なるもの』から區別さるゝ所の——即ち美的意味の強勢因子としての『現實的なるもの』若しくは現實味を有するものと呼ぶのである。實際的興味の爲めに凡べての現實的實際的なるものを、假象や影像的なるものに優つて重要なものと見做すやうに慣らされて居る吾々に依つて、實物が影や姿よりも尙一層強い度に於て捕捉され知覺されるのは怪しむに足りない。而して此強度が感覺内容そのものゝ意味を強調するに至ることも明らかである。其自らとしても已に面白い滑稽な失策話

などが、屢狡猾な話手の口から自家の經歷談として物語られると云ふ事實や、其れとは反對に、事實あつたと云ふことが、之れに似通つた純粹なる美的形像に特殊の興味を色附けると云ふ事實、例へば歴史上の戦争を題材として居ることが純粹なる美的意味の上から見て已に價値ある所の戦争小説或は戦争畫をして、尙一層の興味あらしめる如きは『現實味』に基く強勢因子の力を明示する好い例である。

間接的強勢因子として最後に之に擧げて置きたいのは『興奮的』『激動的』或は『戰慄的』*Dis Sensationelle* と名づけてもよい所のものである。(吾々が此に試みつゝある是等の命名法が凡て *denominatio a fortiori* なることは斷はる迄もあるまい)吾々が依他の意味の立場からして或一定の生活状態若しくは地位階級や、さう云ふ状態又は地位に在る或一定の人間などに對して有する強い興味、換言すれば概念に基いて或一定の類に對して有する所の興味を、其類から移して、其類に屬する個々のものに——假令其個々者は之れを個々として觀照する時、吾々に取つて全く意味を有せぬに拘はらず——強い意味を附與する如き場合は皆此所に云ふ『興奮的』或は『刺戟的』なるものに屬する。約言すれば、一つの類若しくは一つの概念の有して居る意味が、個々のもの(即ち感覺内容)に移されて、其れの意味を強調する場合が即ち『興奮的』或は『戰慄的』

である。例へばカイゼルは、吾々に取つては、帝王として他の總ての人間に優つた意味を持つて居る。併し其意味は概念に基くものであり、唯概念的に捕捉せられ得る表現に於て現はれるのである。それにも拘はらず、カイゼルの持つて居る此概念的意味は自ら現身としてのカイゼルの視覚像の意味をも高からしめ、吾々をして彼を見んが爲めに數時間も街上に待つことを苦とせしめず、そして實際見ることを得たカイゼルの視覚内容が或は他の將軍の其れと毫も異なることなきに拘はらず、吾々をして彼を見得たことの幸福を感じせしめる。此所に『興奮的』或は『戰慄的』なる強勢因子が認められるのである。それと同様なることは、名高い犯罪人や災害の光景に就ても云はれ得る。而して此等の場合に於ても亦前述の音樂に於ける感情的因子の場合と同じく、不快感的なるもの、恐ろしきもの、従つて吾々を興奮せしめ又は戰慄せしめる所のものは、其等が生活の實際上に於て當然吾々に強く注意せらるゝものであると云ふ理由からして、自ら亦感覺内容として即ち形像として、快感的なるものに比すれば尙一層意味強きものとなると云へる。火災の光景が強い印象を與へるのは實に此の如き事情に基くのである。文學に於て興奮的戰慄的なるものの色々な種類——例へばアマデウス・ホフマンやポーやオスカ・ワイルド等の諸作を想へ

——が有する同様なる效力に就ては詳しく述ぶる迄もなす。

以上述べた所からして間接的強勢因子の役目も亦決して輕視すべからざること  
 は明らかであるが、それと同時に、強勢因子の共働に對しては一方に於て、之れを制御  
 する爲めに最も強い游離方法(即ち排除と集中と)の必要なることを十分に注意すべ  
 きであらう。間接的強勢因子は畢竟其力を、吾々の『見んとするの意志』が日常生活に  
 於て依他的實際的概念的興味の下に自ら養ひ來たつた所の習性から得來るのであ  
 る。従つて是等の因子が其根柢を置いて居る所の依他的意味をして、依他的意味と  
 して力を得來らしめぬ爲めに、美的意味の集中と依他的意味の排除隔離とが必要で  
 ある。若し一方に於て集中と排除と、及び直接的強勢因子とが働いて居るのでなけ  
 れば、間接的強勢因子は動もすれば美的意味に對する強勢因子としては役立たずし  
 て、寧ろ其破壊に導かしめる原因となるであらう。強い依他的意味に基く内容が、其  
 依他的意味から游離され、其依他的意味を云はば潛勢的たらしめて、美的強勢因子た  
 る『見るに價するものと』して働き得るのは、美的意味が他方に於て十分に游離され、依  
 他的意味に煩はされぬ程に確立されて居ること——尙嚴密に云へば斯く游離し又  
 確立する所の力が他方に於て働きつつあること——を豫想しなければならぬの



である。それ故に、美的形像一意味的若しくは一義的(記述は、前に述べた排除的(隔離的)因子と集中的因子と及び直接的強勢因子とを指摘することに依つて、美的形像の全體が其自ら意味を有する感覺若しくは知覺内容たることを確立し得て始めて其基礎が安定となる。間接的強勢因子の美的形像に於ける價值と意義とは、其所からして明瞭となるのである。——間接的強勢因子は、それが依他的意味に基くの故を以て美的形像から除外さるべきでないと共に、美的形像の中に依他的意味が強勢因子として當然入り込み來るの故を以て、美的形像を知覺内容其自らの意味と見做す吾々の見解が非難さるべきでもない。間接的強勢因子が除外さるべき理由のないことと及び之れが入り込み來ることに依つて美的意味が破壊さるべき理由のないことは、此因子が美的形像を構成する全體の中に於て如何なる地位を占めて居るかを知らぬことに依つて自ら明らかになる。而してそれは恰も吾々が上述する所に於て確定せんと試みたる點なのである。(未完)